

台湾歴史建築「逍遙園」における 左官技術協力事例レポート

株式会社あじま左官工芸
岡崎 灌涵



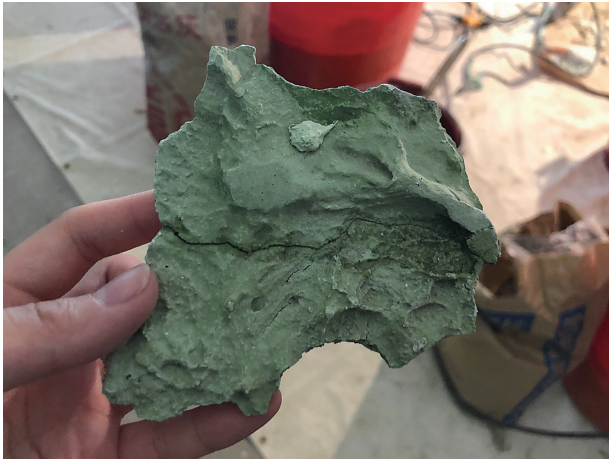
近年、台湾においては歴史的建造物に対する関心が高まっています。特に、1895年から始まる50年近くに及ぶ日本統治時代に建てられた「日式建築」と呼ばれる和風建築に対する保護意識が強く、文化財への登録件数が全体の半数を占めるようになりました。数ある日式建築の中でも異色を放ち、国内外より注目を浴びている逍遙園は台湾高雄市市街地に位置し、台湾の文化財等級である「歴史建築」として2017年より保存修理工事がはじまり、2020年10月に竣工を迎えました。弊社は台湾国立高雄大学の陳啓仁教授から技術協力の依頼を受け、現状調査および左官復原工事に参加しました。現状調査により得られた考察は工学院大学客員研究員である菅澤茂氏、左官工事における材料復原に関連した研究は同大学田村研究室によってすでに報告されています。本報告では施工を行った建物の詳細に加えて、工学院大学と共同で行った材料分析のプロセスおよび台湾の職人との交流内容についてご紹介します。

逍遙園は京都浄土真宗西本願寺派第22代目法主として知られる大谷光瑞が晩年、熱帯農園の研究及び仏教の普及の為に、台湾に建てた和洋折衷の建物です。1940年3月に着工し、同年11月に逍遙園として開園されました。その際、京都西本願寺にあった別の建物の部材をいくつか移築し、日本からも大工が参加し、現地の職人との共同作業によって施工されたと言われています。寄棟造で2階建ての1階はRC造・レンガ造が併用され、2階は木造、小屋組に鉄骨造が用いられています。外部は大壁で建物全体に緑色の洗出し仕上げ、内部の大壁では木摺下地、真壁では小舞下地と、用途に応じた下地が混在していますが、漆喰仕上げが大部分を占めており、2階応接間にある船底天井の緑色スタッコ風漆喰仕上げが特徴的です。そのほか、現場引き蛇腹や砂壁などの左官仕上げも見られ、急ピッチで建てられ建物であるとは言えど、和洋の融合を実現させようと出来る限りの手を尽くした形跡が感じられます。



船底天井・スタッコ風緑漆喰仕上げ





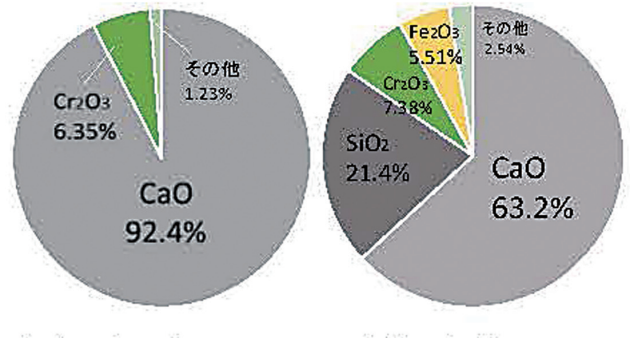
船底天井の元の仕上げ



色差計によって色を数値化して比較



現地での交流会にて材料分析のプロセスを解説



蛍光X線分析装置によって顔料の種類と割合を考察

今回の左官修復工事では外壁、内壁共に緑色の復元が焦点になっていました。材料および色の真正性（オーセンティシティ）を守るため、弊社では工学院大学と協力し、既存部材に対して構成物質の分析を行い、顔料の役割を担う物質が酸化クロム（Cr₂O₃）であること、また、その含有割合を割り出しました。酸化物質は経年変化による色の変化があることを考慮するため、異なる顔料割合のサンプルを作成し、色差計によって色を数値化して、既存のサンプルの最も中性化が進んでいない部分と比較して最終的に調合を決定しました。

また、施工に際しても、現地の左官職人と工法・材料・道具などの共有を行い、我々が帰国した後も引き続き施工が出来るように技術交流を行いました。作業中には台湾の左官親方も興味深々に身を乗り出して

日本の鍔さばきを目で追い、遂には鍔を持って一緒に塗り始めるという、胸熱な場面もありました。

台湾では日本統治時代には多くの和風建築が建てられたため、日本でも稀に見る手の込んだ仕上げのものが多く残されていますが、その技術を保持した職人は現地にはほとんどいません。今回の日台技術交流が契機となり、日本の優れた左官技術や建築物が台湾においても伝承されていくことを切に願います。（岡崎）

高雄市歴史建築逍遙園

調査・研究：国立高雄大学永続居住環境科技中心

設計：趙崇欽建築師事務所、浩建築師事務所

監理：浩建築師事務所 <https://haoarch.com/>

施工：正宇營造股份有限公司